

称号及び氏名	博士（経済学） 近藤 真司
学位授与の日付	平成22年2月10日
論文名	「初期ケンブリッジ学派研究ーアルフレッド・マーシャルを中心としてー」
論文審査委員	主査 津戸 正広 副査 松川 滋 副査 村澤 康友

## 論文要旨

本研究は、アルフレッド・マーシャル(Alfred Marshall, 1842-1924)の経済学とウォルター・トーマス・レイトン(Walter Thomas Layton, 1884-1966)の経済学を考察することにより、初期ケンブリッジ学派における応用経済学的側面を明らかにするものである。ケンブリッジ学派の研究においては、一般に、マーシャル経済学の流れを継いだピグーやケインズの理論的側面が強調されがちである。しかし、マーシャル経済学には理論的側面と並んで応用経済学的な側面が存在し、後者の側面の研究は、いまだ十分になされているとは言い難い。そこで、マーシャルがケンブリッジ大学経済学教授に就任して後、20年近い歳月を費やして創設した経済学トライポス(卒業試験)から生まれた経済学者であるレイトンを取り上げることにより、この問題を考察した。

レイトンは、マーシャルの講義を受講し、さらに彼の引退後には応用経済学を引き継ぎ、ケンブリッジの学生たちを教育した。レイトンを考察することにより、ケンブリッジ学派の形成過程ならびにマーシャルの経済学的課題や彼が十分体系化できずにレイトンが深化させたもの、さらにはピグーやケインズとは異なるケンブリッジ学派における応用経済学という分野の特質が明らかになる。

本論文は、マーシャルが自らの経済学の中心課題としていた有機的成長というものを労働者と企業家の視点から明らかにした。マーシャルは、土地・資本・労働という生産の3要素に加えて、産業組織を生産の第4の要素と見た。そこで、資本に対しては企業家、労働に対しては労働者、産業組織に対しては企業組織を取り上げ、考察した。企業家と労働者が企業組織で果たすべき役割についても、考察の対象としている。

マーシャルの有機的成長は、国民所得の量的増大という経済成長だけではなく、人間の

質的向上を伴う社会発展を累積的にもたらすという成長プロセスを意味する。彼は、『経済学原理』において、「経済問題を有機的な成長としてではなく、静学的な問題として取り扱うと不完全にしか表現できなくなる」と述べているが、有機的成長論は、彼の経済学体系の骨格をなすものである。

本論文は、以下の章から構成されている。

## 序 章

### 第1章 マーシャルの労働者問題への途

### 第2章 労働者論

### 第3章 企業者論

### 第4章 複合的準地代と有機的成長

### 第5章 経済進歩における労働者の役割

### 第6章 マーシャル経済学における進歩と自由

### 終 章 ケンブリッジ学派におけるマーシャルとレイトン

序章では、本研究の目的が、マーシャルの有機的成長論を労働者と企業者の視点から考察することであることを示した。また、経済理論の歴史的背景ならびに社会経済史的な背景も明らかにした。さらに、マーシャル研究の動向と展望を提示し、本研究をその中に位置づけた。

第1章では、彼の初期著作を考察しながら、彼が労働者問題に関心を持った経緯を明らかにした。マーシャルの初期の研究テーマは、「人間の可変性」であった。彼は、力学的・物理学的方法論ではなく、生物学的方法論に基づく経済学こそが、この問題を解決しうると見ている。経済学の研究を進めるにつれて、彼の関心は生物学的方法論に基づいた「有機的成長」というテーマにより一層向かっていく。この章では、労働者問題から有機的成長について検討することの意義を示した。

第2章では、マーシャルの『経済学原理』における労働者問題を取り扱った。彼は、労働者階級が貧困状況から抜け出し自立する条件として、「生活基準」を身につけることを求めている。マーシャルが考える「生活基準」という概念は、単に生活水準という意味ではなく、自らの生活状態を改善し、肉体的・精神的進歩を図っていくところの人間の活動の上昇を意味している。そこで、この「生活基準」という概念を中心にして、国民所得、教育問題、階級論を分析することにより、労働者問題の側面からマーシャルの有機的成長論を明らかにした。労働者の「生活基準」の向上つまり彼らの生活習慣の改善および潜在的な能力の開発によって、生産性の向上、国民分配分の増加、さらには次世代へのより良き生活習慣と能力開発がもたらされるのである。これらの考察により、労働者の知的・倫理的成長という経済発展の経路をマーシャルが体系化したことを明らかにした。

第3章では、産業組織の問題から彼の企業者論および組織論について考察した。経済学史研究では、シュンペーターを除いて、企業者論が検討されることは多くない。また、シュンペーターの企業者論が新結合(イノベーション)を中心とした供給面を中心に議論して

いるのに対して、マーシャルの企業者論は、マーケティング・広告・ブランドなどの需要面やリスク負担にまで言及しながら議論を展開している。さらに、彼は、企業者による企業組織の形成能力にも触れている。このように、マーシャルの企業者論においては、より多面的な企業者論が展開されていることを示した。

第4章では、マーシャルの準地代の概念と複合的準地代の概念について考察した。彼は、土地における地代にならって、機械から発生するものに対しては「準地代」の概念を、組織から発生するものに対しては「複合的準地代」の概念をあてた。複合的準地代は、短期的なものであるのか、それとも長期的なものであるのか、さらには有機的成長においてそれが重要な役割を果たすのか否かという議論がある。そこで、複合的準地代と有機的成長論との関係をめぐる論争を取り上げ、企業者が優れた企業組織を形成し、複合的準地代が発生すると、その組織の構成員は組織を継続していこうとするので、その組織が資産的な性格を持つことになり、長期にわたり存続しうることを明らかにした。したがって、筆者は複合的準地代を長期的なものであると考える。しかし、複合的準地代は、優れた組織を作り上げた結果もたらされるものであり、それが主たる原因となって有機的成長をもたらすものではないことを示した。

第5章では、経済進歩における企業者と労働者の役割について、労働者と企業者の稼得概念、労働者の向上の可能性、労働者の階層移動、企業組織という視点から検討を行った。マーシャルは、労働者の貧困問題を自らの有機的成長論に組み入れ、労働者の進歩向上を生みだしていく新しい経済システムを考えている。彼が求めたものは、経済進歩を通して人間的進歩を果たしていくことであり、人間的進歩を通してさらなる経済進歩を果たしていくことである。彼は、労働者階級の能力を活かしていくことが経済進歩につながると考えている。また、親から資本を受け継がなくても、能力のある者が企業者として活躍できるような企業組織をマーシャルは描いている。労働者の階層移動の実現が、社会の発展につながるのである。

第6章では、マーシャルにおける経済的自由の問題を取り上げた。この問題は、経済的進歩との関係で重要な問題である。そこでは、マーシャルの経済的自由を国営企業との関連、経済進歩と「経済騎士道」の視点から考察した。彼は、国家の干渉によって労働者の貧困問題を解決しようとしたのではなく、経済進歩によってその解決を図ろうとしたのである。経済進歩に必要なものは、経済的自由である。経済的自由は進歩の源泉であり、その実現のための方策が、彼にとっての課題であった。自由放任と国家干渉とを互いに排他的な二者択一のものとは見なすのではなく、この両者のバランスが有機的成長にとって必要であることを明らかにした。

終章では、マーシャルとレイトンを取り上げることにより、両者の経済学の相違点およびレイトンがマーシャルから継承したものについて考察した。そのために、マーシャルの初期著作ならびにレイトンの『物価研究入門』と『資本と労働の諸関係』を取り上げた。

まず、マーシャル経済学には理論的な側面と応用的な側面が存在することを明らかにし、次いで、レイトンがマーシャルから事実の蒐集、整理、分析、解釈という帰納的な研究方法論を学び取ったことを示した。レイトンは、ケインズやピグーのように新たな理論の構築や分析道具の発展に貢献したのではなく、当時重要になりつつあった統計分析を押し進めたことを明らかにした。彼は、マーシャル経済学の応用に貢献した経済学者である。初期ケンブリッジ学派には、理論的な側面と応用的な側面が存在したにもかかわらず、その後の時代状況とりわけ世界恐慌等の事情により、理論の側面に経済学の関心が集中し、応用的な側面が軽視されることになった。したがって、初期ケンブリッジ学派における応用経済学の側面に光りを当てることは、大きな意義をもつ。

## 学位論文審査結果の要旨

本論文は、アルフレッド・マーシャルとウォルター・トーマス・レイトンの経済学を考察することにより、初期ケンブリッジ学派がどのような特質を持っているかを明らかにするものである。そのために、マーシャルの労働者論や企業者論を検討することを通じて、彼の有機的成長についての考えが明確にされる。また、マーシャルの先駆的な経済学を一般的な形に体系化し、深化させたのが、レイトンや弟子たちであるので、レイトンを考察することにより、応用経済学的側面をも重視する初期のケンブリッジ学派の特質を、より鮮明に描き出すことができている。

序章においては、本研究の目的と方法が示され、マーシャル研究の動向と展望から本研究の意義が明確にされている。

第1章では、マーシャルの家庭をめぐる誤った通説の検討から始め、労働者階級の状況改善の問題から有機的成長の研究に向かう道筋が示されている。

第2章では、彼の主著『経済学原理』における「生活基準」と「安楽基準」という概念を手がかりにして、国民所得、教育問題、階級論を検討し、この検討により、労働者階級の人間の進歩が有機的成長において大きな役割を果たすことを示した。

イノベーションに着目するシュムペーターの企業者論とは異なり、マーシャルはマーケティング・流行・ブランドなど需要面に強く関わる多面的な企業者論を展開するが、第3章では、この多面的な企業者機能と企業者の組織形成能力が考察されている。

第4章では、マーシャルの「複合的準地代」という概念と有機的成長との関連を考察している。この問題をめぐる際立った論争にかかわり、複合的準地代が長期的性格を持つことを示した。

第5章では、労働者と経済進歩の関係を取り上げ、労働者向上の可能性、階層移動、企業組織、

稼得概念の共通性などを考察している。

第6章では、マーシャルにおける「自由放任」の問題、「経済騎士道」の問題を取り上げ、彼の立場を経済的自由主義と捉えることの根拠を示した。

終章では、マーシャルが創設した経済学トライポス(卒業試験)で最優秀を獲得したレイトンに注目し、レイトンが、マーシャルの応用経済学的性格を受け継ぎ発展させることにより、理論経済学と応用経済学の両面を備えた初期ケンブリッジ学派の確立に貢献したことを明らかにしている。

全体として本論文は、マーシャル経済学の理論的側面のみならず、これまで軽視されてきた応用的側面を浮き彫りにしている。このようなマーシャルの応用的側面を明示するために、これまで注目されることが少なかったレイトンの経済学をいち早く取り上げた功績は大きい。

本審査委員会は、学位論文の審査ならびに学力確認の結果に基づいて博士（経済学）の学位を授与することを適当と認める。